

論 文 要 旨

氏 名	植 田 愛 彦
タイトル (日英併記)	Advocacy of diagnostic criteria for maxillary incisive canal cysts based on alteration of normal maxillary incisive canals according to aging in Japanese populations (日本人の正常切歯管の加齢変化とそれをもとにした鼻口蓋管嚢胞の診断基準の提唱について)
<p data-bbox="159 562 560 600">論文の要旨 (日本語で記載)</p> <p data-bbox="124 636 1410 1245">本研究の目的は、CT 画像における正常切歯管と鼻口蓋管嚢胞との鑑別点を確立することである。研究対象は、鼻口蓋管嚢胞と診断された患者 40 名の CT 画像および切歯管部分に異常の認められなかった患者 (コントロール群) 220 名の CT 画像とした。研究対象の CT 画像データをワークステーション上で 3 次元構築し、鼻口蓋管嚢胞および比較対象群の切歯管の大きさ、形態、CT 値について計測した。その後、鼻口蓋管嚢胞と正常切歯管との鑑別点についてレトロスペクティブに検討した。形状は切歯管の矢状断面では、円筒、漏斗、紡錘、砂時計型に分類した。軸位断面では、円形、楕円形、ハート形、その他に分類した。さらに、矢状断面上で鼻腔底を水平面として、その面に垂直な線を基準として切歯管の方向が 10° 以上の変化で傾斜、10° 未満の変化は垂直とした。方向は切歯管と口蓋壁の屈曲に注目して、垂直、垂直彎曲、傾斜、傾斜彎曲に分類した。切歯管の大きさは矢状断面上で、切歯管の鼻腔側および口蓋側の開口部の中間点を測定した。解剖学的亜型として、切歯管の鼻腔の開口部数と側管の存在を調べた。切歯管内の CT 値は周囲の骨が含まれないように ROI を設定および測定した。</p> <p data-bbox="124 1258 1410 1821">結果は、正常な被験者における切歯管の大きさに有意な差が男性と女性の間で見出された。切歯管の大きさは、加齢により有意に大きくなっていった。切歯管の形状、解剖学的変異、および CT 値は加齢および性差による有意な変化は認められなかった。ただし、矢状断面上で砂時計型の切歯管である場合は、正常切歯管の被験者よりも鼻口蓋管嚢胞の患者が有意に多かった。通常の切歯管と鼻口蓋管嚢胞との間に CT 値に差違はなく、サイズにのみ違いが見られた。しかしながら、切歯管のサイズ 6 mm という診断基準を用いると、60 歳以上の被験者に対しては鼻口蓋管嚢胞を適切に鑑別はできなかった。60 歳以上では、鼻口蓋管嚢胞は、切歯管のサイズの 7.1 mm をカットオフ値とすることでより適切に鑑別することができた。一方で、60 歳未満の患者では、カットオフ値は従来の 6.0 mm が適正な値であった。結論としては、鼻口蓋管嚢胞と正常切歯管の鑑別診断時には、切歯管の長径を基準にすることは有効であるが、性別や加齢に伴う切歯管の長径の変化を考慮すべきであることが示唆された。</p> <p data-bbox="124 1834 1410 2011">本研究の臨床的意義として、鼻口蓋管嚢胞を診断するときは、年齢と性差を考慮する必要があると示唆されたことである。特に、高齢者 (60 歳以上) の人においては、従来の基準を超える切歯管のより大きなサイズを基準として使用する必要があると示唆されたことである。</p>	